

2025. 3. 23 (日) ルカ 23 : 26 ~ 31

23:26 彼らはイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというクレネ人を捕まえ、この人に十字架を負わせてイエスの後から運ばせた。

23:27 民衆や、イエスのことを嘆き悲しむ女たちが大きな一群をなして、イエスの後について行った。

23:28 イエスは彼女たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣いてはいけません。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのために泣きなさい。

23:29 なぜなら人々が、『不妊の女、子を産んだことのない胎、飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来るのですから。

23:30 そのとき、人々は山々に向かって『私たちの上に崩れ落ちよ』と言い、丘に向かって『私たちをおおえ』と言い始めます。

23:31 生木にこのようなことが行われるなら、枯れ木には、いったい何が起こるでしょうか。』

<説教>

裁判官だった総督ピラトはイエスには死に値する何の罪も見つけられず、イエスを釈放しようとした。しかしイエスを訴えたユダヤの最高法院の議員たちと民衆のしつこい大声の要求がいよいよ強くなるのを見て、それに屈し、イエスを彼らの要求どおりにすることに決めた、その様子を先主日に見ました。

本日の聖書箇所にはそのイエスが十字架につけられるその場所に向かっている場面が描かれています。そしてそのイエスの後につき、イエスに同行する二種類の人のことが記されています。一人は〈シモンというクレネ人〉(26)、もう一つは〈民衆や、イエスのことを嘆き悲しむ女たち〉の〈大きな一群〉(27)です。それぞれのイエスとの現在から未来における関わり、それが大きな問題でした。

まず 26 節、シモンというクレネ人についてです。ここの〈彼ら〉とは、これまで読んで来たルカの記述の流れでは、イエスをピラトに訴えたユダヤ人たちになります(ルカは敢えてそのように書いたのだと思われます)が、他の福音書を見ると、これらを実際に行ったのはピラトの下にあったローマの兵士たちでした。そしてそれら福音書によれば、イエスは兵士たちに引き渡される前に既にむち打ちを受けていました。このむち打ちは十字架刑の始めに行われたものでしたが、場合によってはそれだけで死んでしまうほどの厳しいものでした。最後の晚餐以降でしょうか、ゲツセマネでの祈り、ユダヤ人たちに捕らえられ、大祭司や最高法院の前に立たされ、ピラトのところに連れて行かれ、ヘロデへのたらい回しも含めて長い裁判を受け、そして厳しいむち打ちを受け、イエスは確かに人間として体力の限界だったでしょう。十字架につけられる犯罪人は自分がかけられる十字架は自分で背負って刑場まで行くことになっていましたが、それはもう無理だと見做されました。それで、イエスを引いて行く途中、ちょうど〈出会った〉(マタイ 27:31)、そこを〈通りかかった〉(マルコ 15:21)クレネ人シモンを捕まえてイエスの十字架を負わせました。

〈クレネ〉は今の北アフリカ、リビアにある場所で、エルサレムからは二千km近くの道のりです。そんな〈田舎(直訳「野」)〉からエルサレムに来ていたということでしょうか。

おそらくその時の彼からすれば「運悪く」「不幸にも」目をつけられ、捕まってしまう、イエスという死刑囚の十字架を無理矢理に担がされ、一緒に後から刑場までついて行くことになってしまった、何と言うことだ、ということだったでしょう。

しかし、このことが、この人にとってどうやら決定的なことになったようです。マルコは彼を〈アレクサンドロとルフオスの父〉(マルコ 15:21)と記しています。マルコが福音書を書いた、又は宛てた地(ローマとも考えられていますが)の教会にアレクサンドロとルフオスという兄弟がいて、その父が何とあのイエスの十字架を背負った人だと言っているわけです。ルカは「使徒の働き」で〈アンティオキアには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン…がいた〉(使徒 13:1)と記しています。このシメオン(つまりシモン)がクレネ人シモンのことではないかと考えられています。使徒パウロはローマ人への手紙で〈主にあって選ばれた人ルフオスによろしく。また彼と私の母によろしく〉(ローマ 16:13)と言っています。このルフオスはクレネ人シモンの子だと考えられ、とすればルフオスの母つまりクレネ人シモンの妻がパウロにとって「母」のような大事な人だったということにもなります。このようなことから、どうもクレネ人シモンはイエスの十字架を負わされたことがきっかけとなって、やがてイエスを信じ、その妻も子もキリスト者となったのではないかと考えられています。

イエスのご自分の苦難と復活を弟子たちにお伝えになったとき「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」と言われました(ルカ 9:23)。また「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」とも言われました(同 14:27)。これらイエスのみことばを思い起こされる出来事、それがクレネ人シモンの身に起こったことでした。

続けて〈イエスの後について行った〉〈大きな一群〉(27)、そしてここではその代表として〈イエスのことを嘆き悲しむ女たち〉(27)のことは見ましょう。彼女たちは後に記される〈ガリラヤからイエスについて来ていた女たち〉(23:49)とは別の、〈エルサレムの娘たち〉(28)でした。イエスは彼女たちの嘆き悲しみを受け止めつつも、わざわざ〈彼女たちの方を振り向いて〉厳しい警告をなされたのです(28-31)。これは要するに、イエスをキリストと認めず、受け入れず、信じず、嫉み、憎み、神冒瀆者として、またローマへの反逆者としてピラトに訴え、ピラトの判決にも逆らってイエスを十字架につけて殺すエルサレム(のユダヤ人たち)に対する神の厳しい裁きの警告でした。「結婚しても不妊で子供がいないことほどの不幸はない」とされていた当時のユダヤ人にとっては衝撃のみことばだったでしょう。不妊の方が幸いだという日が来る、というのですから(29)。また、その裁きの大きさは、山々や丘が崩れて一気に生き埋めになって死んでしまう方がまだましだと思われるほどのものだともイエスは言われました(30)。「その日」は一つには約40年後のローマ軍によってエルサレムが滅ぼされることでした。しかし究極的にはそれは十字架で殺され、復活され、昇天なさるイエスが再臨するときの最後の審判の〈日〉にほかなりません。Ⅱテサロニケ 1:6-9によれば、その日、主イエスが燃える炎の中に現れ、主イエスの福音に従わない人々に永遠の滅びという刑罰を与えられます。そのことが31節の警告です。

〈生木〉(31)とは、全く罪がなく、いのちの源、いのちであるイエスご自身のことです。そのイエスを受け入れず、最も厳しく悲惨な十字架刑で殺そうとしているエルサレムの人

々は、自分の背きと罪の中に死んでいる、いのち無き〈枯れ木〉です。〈生木〉と〈枯れ木〉の比喻はエルサレムへの火による神の裁きを預言したエゼキエル書 20:47 からのものでしょう。イエスを信じない者への神の裁きを受けることこそ最高究極の「悲惨」「不幸」なのです。そしてそれはエルサレムの人々に限らず私たち罪人すべてが一番恐れるべきこと、何としても免れなければならないことなのです。

それでイエスは言われます。そんな悲惨を身に招いている自分の罪を覚え、泣きなさい、と。子沢山こそ最高の幸せと思い、一方で自分たちと子どもたちが神のさばきを免れ、救われるために自らイエスを信じることをせず、子どもたちにもそうさせて来なかった罪責を痛感して、その罪を認めるように。その罪を身に負って十字架で神のさばきを身代わりに受けてくださり、さばきを免れさせてくださるイエスを信じて悔い改めなさいとイエスは警告なさったのです。もちろん、「泣く」という外面ではなく、イエスを信じ、罪を悔い改めることが大事です。〈枯れ木〉にすぎない私たち、そして子どもたちが、十字架で死なれ復活された〈生木〉なるイエス・キリストを信じて、主イエスの後につき従って行くよう、主イエス・キリストの御名によって祈ります。